

学生大使 実施報告書

氏名：佐川亜衣

学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部人文社会科学科人間文化コース三年

派遣先大学：ガジャマダ大学

派遣期間：8月29日～9月13日

1 日本語教室での活動内容

学生によって日本語の学習レベルは様々であったが、自身が受け持った多くの生徒は平仮名からのスタートであった。まずはホワイトボードにすべての平仮名と発音を書き、生徒の名前を平仮名、そして片仮名で書いてもらうことから始めて、そこから「インドネシア」や生徒の好きなものを日本語で書けるまでを特に重点的に行った。

また、数人ではあるが日本語がとても上手な生徒を受け持ったときは、会話やインドネシア、ジョグジャカルタを紹介する作文を書いてもらったりと、なるべく日本語のアウトプットをしてもらうように心がけた。

ガジャマダ大学生は一度教えると吸収がものすごく早く、次に会った時には教えたフレーズを使ってくれたりするため、日本語文型というよりは会話で使いやすいような言葉を多く教えたような印象がある。

1時間半と長い授業であるため、生徒が退屈しないようになるべく日常的な会話から日本語文型へと誘導したり、逆に覚えたインドネシア語を用いて、それを日本語ではこのように言うんだよ、というふうに、とにかく親しみやすい指導を心がけた。

最終日には、自身への手紙を日本語で書き、日本語で読み上げてくれた生徒もいた。その中には授業で教えていたフレーズが多く含まれており、一緒に勉強をしてきた成果がふんだんに見られとても感慨深くなった。

2 日本語教室以外での交流活動

午前の日本語教室が終わると、毎回その生徒たちと学内のカフェテリアなどで昼食を食べた。日本にはない料理の数々だったため、分からない料理や食材はその都度生徒たちに説明をしてもらっていた。

自身は左利きなのだが、インドネシアの文化に合わせて右手だけで食事することに挑戦もした。左利きということが分かると、現地学生はかならず「生まれつき？」「何をするにも左手？」と興味深そうに尋ねてきた。これも文化の違いなのであろうと実感した。

日本語教室の生徒と一緒に大学の裏手にある屋台でたい焼きと一緒に食べに行った。常設の屋台街は活気で溢れており、インドネシアの学生街の雰囲気存分に感じる事が出来た。

授業中、自身の趣味を紹介する文を教えている最中でホラー映画を観ることが趣味だという生徒がおり、インドネシアではホラー映画がメジャーであるという紹介も相まって、人生初のホラー映画を観に行くことになった。時間帯の都合上映画は西洋のものであったが、字幕がインドネシア語であったため、映画が怖くて見れないときはそこでインドネシア語のフレーズを少し学んでいた。

また、週末になるとサポート役としてそばに居てくれていた現地の方々に様々な場所へ連れて行って頂いた。

【学生大使 実施報告書】

人生初の行動に多く挑戦することが出来た貴重な経験になったと思う。

英語が苦手で、会話が上手く成り立たなかったことを歯痒く思うが、それでも自身の言いたいことを汲んでくれて話してくれたインドネシアの方々には感謝の念でいっぱいである。

もっと現地の方々と会話がしたいという思いから、サポート役の方や授業の合間に生徒たちからインドネシア語を教わった。なかでも、ジャワ語で「matur nuwun」(ありがとう)と伝えると毎回驚かれ、嬉しそうに同じくジャワ語で「sami sami」(どういたしまして)と答えてくれるのがこちらとしてもとても嬉しかった。

3 参加目標への達成度と努力した内容

参加目標として、「この経験を通して大きく成長する」ことを掲げていた。その内容としては、現地学生とたくさんコミュニケーションを図ったり、日本語学、日本語教育の授業を取っているため、分かりやすく日本語を教える、というようなものであった。

自身の語学力では完全に話したいことを話すことが出来る、というわけにはいかなかったが、身振りや手振り、写真や、時には覚えたインドネシア語を駆使してコミュニケーションに励んだ。その結果、インドネシアでの友達が出来て一緒にご飯を食べに行ったり、人生初のホラー映画を見たり、人生初の海でのキャンプをすることが出来たりした。

普段は初対面であったり付き合いが浅い相手には素直に感情を出すことが難しいのだが、二度とない経験だからと勇気を出して素直になり、初歩的な単語だとしても話そうという心構えで臨んだ。

こちらは概ね達成出来たのではないかと考える。

日本語教育に関してであるが、「に」格助詞と「で」格助詞の違いを尋ねられた時に、内容は大学の授業で学習しているので分かるのだが、それを英語で、日本語学習者にも分かりやすいように説明することがかなわなかった。それぞれが文法的・非文法的になる文章を書いて説明したものの、相手の理解が不十分それで非常に歯がゆかった。これは、英語力の向上と合わせて今後の課題とする。

4 プログラムに参加した感想

このプログラムの派遣直前の講義では、菅原先生から「どうしてこのような場所に来てしまったのだろう、と思うことはかならずみんなある」と言われており、実際、飛行機に乗る直前までは不安でいっぱいでも逃げ出したい気分になっていた。

しかし、いざインドネシアに来て過ごしてみると、ついぞそのような感情に至ったことはなかった。滞在期間も帰国後も、「インドネシアに来てよかった」という思いだけを強く抱いている。

強いて言うのであれば、自身の英語の能力が非常に低かったため、コミュニケーションという面では本当に言いたいことが言えたのかといえばそうではないのであろうという悔しさが残った。

インドネシアに来て、たくさん新たなことに挑戦をし、自身が一回り大きく成長したことを実感している。

このプログラムに挑戦して良かったと心から思う。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回の経験を通じて、コミュニケーションが上手いかなかった悔しさから、より自身の英語能力の向上に励むという目標ができた。さらに、再び訪れる機会の為に、英語だけではなくインドネシア語の学習も継続して進めていきたいと強く思う。

【学生大使 実施報告書】

宗派や環境などが何もかも違うインドネシアを訪れ、人々や文化と交流することによって、日本や自身のことを改めて見つめ直す機会となった。

自身に残された学生生活は短いが、このかけがえのない経験を糧に、様々なことに対して実直に励んでいくことを誓う。

最後に、我々学生大使のことを常にサポートしてくださった現地の方々、派遣の機会を作ってくれたガジャマダ大学と山形大学国際交流課の担当の方、菅原先生、交流してくれたガジャマダ大学生の友人たちに感謝を申し上げます。



ボロブドゥール遺跡



学部のモスク

【学生大使 実施報告書】



キャンプ